

日時	令和2年9月24日 午後2時から4時まで
場所	長久手市交流プラザ 大会議室
出席者	16名中14名出席 会長 成田暢彦 委員 石橋健一 委員 長谷川明子 委員 増田理子 委員 森田直美 委員 荒川俊史 委員 森 広幸 委員 鶴見紘二 委員 廣田賢一 委員 三宅俊成 委員 Peter Heintl 委員 吉田弘美 委員 水岡恵子 委員 青木幸子 市（事務局） くらし文化部次長 日比野裕行 環境課長 富田俊晴 同課課長補佐兼環境係長 児玉剛 同課ごみ減量推進係長 大谷悠 同課主任 佐藤雄亮 一般財団法人地域問題研究所 春日俊夫、押谷茂繁
欠席者	副会長 岩渕準 委員 森山輝久
議題	1 第4次長久手市環境基本計画素案について 2 今後のスケジュールについて
公開・非公開	公開
傍聴者人数	なし

議事要旨

議題 1 第 4 次長久手市環境基本計画素案について	
事務局	資料 1 A 及び資料 1 B に基づき説明
○資料 1 B P11 第 3 章 2 第 3 次計画の総括について	
事務局	本日欠席の委員から、A、B 評価の表記しかなく、甘く評価しているように見えてしまうため、例えば A~E 評価としたり、評価の基準を記載したりする等してはどうか。と事前に意見があった。
委員	実施効果と具体的な効果の欄を逆にしてはどうか。内容が具体的に書いて A~C の 3 段階評価でも良い。
委員	評価の定義をすることが大事である。評価段階の細かさは問題ではない。
委員	評価は分かりやすい方が良い。
委員	分かりやすさを重視すると 3 段階の方がよいが、3 段階だと定義が分けづらい。
委員	定義が記載されていれば、3 段階でも 5 段階でも良い。しかし、現状のように 3 段階だとしても、C 評価の項目が 1 つもないことはないのではないかと。第 3 次計画で C 評価だった項目を第 4 次計画でどうするかを考えることが重要である。
事務局	段階は現状の 3 段階のままとする。A 評価、B 評価、C 評価の定義を冒頭に記載するとともに、改めて A~C の評価を振り直すこととする。
○資料 1 B P18 第 3 章 3 基本方針について	
委員	温室効果ガス実質ゼロについて、排出を減らすことだけでなく、吸収源を増やすことについての取組も記載すべき。
委員	温室効果ガス実質ゼロの道筋として、省エネ、再エネ、吸収の 3 要素についてはっきり記載すべき。そういった記載があると、企業として環境に配慮した行動を起こしやすい。
事務局	単位施策 A-3-2「まちにおける緑の保全・創出」が温室効果ガス吸収について記載している箇所であるが、趣旨が伝わるよう書きぶりを修正する。
○資料 1 B P22~ 第 4 章 2 施策の方向、取組について	
事務局	本日欠席の委員から、新規の取組のいくつかが具体的すぎるのではないかと。施策の方向と各取組のつながりが分かりづらいため、取組の解説を入れるか、取組を分かりやすく絞ってはどうかとの意見があった。
会長	取組の記載は具体的でも良い。分かりやすい方が良い。
委員	第 4 次計画がスタートした時、市民がどんな協力をすればいいのかを分かるようにすべき。
委員	それぞれの取組は誰がやるものなのかを明確にすべき。例えば市民に対しても 2025 年までに 3 つやる、2030 年までにもう 2 つやる、ということを具体的に掲げる。基準を明確にしておけば評価もしやすくなる。
事務局	第 4 章 2 に記載している各取組は、取組む主体を明確にしてまとめ直した上で、別の章に記載または別に実行計画を作成する等し、市民等が取組みやすく、後に評価がしやす

	い工夫をする。
委員	市民に説明する際には、この取組ができなかった場合に CO2、ごみ、自然がどうなるのかを示し、市民の危機感、意識を高めるべき。
委員	温室効果ガスの 2 割以上削減を実現するためには、見える化が必要である。
事務局	意見を参考に、計画を推進していく中で効果的な方法を考えていきたい。
○資料 1 B P42～ 第 5 章 重点施策について	
事務局	各プロジェクト毎に、SDGs 推進ポイントとして、本計画で重要視している SDGs の原則である「持続可能で多様性と包摂性のある社会」の実現に向け工夫した点を追記した。17 のゴールアイコンの内、関係が深いものだけをプロットする例が他でよく見られるが、それだけでは SDGs の本質をとらえられないため、掲載していない。
委員	SDGs 推進ポイントだけではなく、該当する 17 のゴールアイコンを示すべき。
委員	重点施策は直接・間接に 17 のすべてのゴールに関係していくことだと思う。
事務局	ゴールアイコンも掲載できるように検討する。
委員	愛知県では、事業所の CO2 削減の成果をランク付けして評価しているのでも活用してはどうか。
事務局	計画を推進する上で参考にする。
委員	A1 の重点施策について、アプリ開発は費用が多くかかるため、費用対効果等も含め考えていく必要がある。
事務局	新たなアプリを開発するという形にとらわれず、既存のごみ出しアプリと連携しつつ web ページでサービスを展開する等、柔軟に対応できる書きぶりにする。
委員	B1 の重点施策について、事業所の食品ロスと限定して書いてあるが、多くの企業は「うちはやらなくてよい」と思われてしまうのではないかと。事業所に取り組んでもらう仕掛けが大事になる。
事務局	本市では家庭ごみは減少または横ばい傾向に対し、事業所の一般廃棄物（主に生ごみ）が近年急増しており、急務であるため、重点施策として設定している。
委員	企業の取組や協力の状況を市民が知ることができるようになると良い。
事務局	最近、市 HP でごみの減量やまちの美化に取り組む事業者を紹介しているが、より内容を充実し、市民に届かせる工夫が必要と考えている。
委員	C の重点施策について、生態系の理解のための学習と自然観察は一連の流れにすべき。興味本位で参加して終わりではなく、知識を得た人が観察会等に参加して欲しい。
事務局	C1 重点施策の書きぶりを修正する。
委員	C2C3 の指標値について、生物多様性保全活動の参加団体数では、市の生き物の状況を示していない。参加団体が増えても生き物が減っては意味がない。
委員	愛知県のグリーンデータブック、レッドデータブック等を活用して、指標種や絶滅危惧種を保全することを目標にしたらどうか。調査は県が実施するのでやりやすいと思う。
委員	今ある種を減らさないことが重要である。
事務局	種の数に関する指標値について、検討する。

委員	C2C3の指標値について、竹林面積は適切か。荒廃した竹林が問題なのではないか。
委員	竹林面積の現状値が記載されていないのはなぜか。
事務局	荒廃した竹林の面積は、環境課に寄せられる苦情からある程度算出することができる。面積の算出ができ次第表す予定である。
委員	D2の重点施策では、地球温暖化に対する適応策のみを掲載しているが、緩和策と適応策をセットで掲げるべき。
事務局	D2はあえて緩和策とは切り分けて適応策について記載している。緩和策は、A.脱炭素、B.循環型、C.自然共生を目指すことと同義と考えている。
○計画の表現について	
委員	第3次計画の評価をはじめ、第4次計画自体、ほとんどの市民は読まない。マンガで表現する等、市民に読んでもらえる工夫をするべき。
事務局	市民が読んでいただけるよう、計画とは別の形で方法を検討していきたい。
議題2 今後のスケジュールについて	
事務局	資料2に基づき説明 次回の環境審議会について、第4次環境基本計画に対するパブリックコメントを締め切った後に開催する予定である。本日の意見をもとに修正し、会長の承諾を得た上で、パブリックコメントを募集する際の案として公表することとして良いか。
委員一同	意義なし。

以上